

1 外国語活動・英語科で願う豊かな学びの姿

英語を介して他者とコミュニケーションをとることが楽しいと感じる気持ちは外国語活動の大切な要素である。また、本学校園の外国語活動では、外国語に対する慣れ親しみや文化に対する気付きが言葉への思考力を高め、その後の中学校での効果的な文法知識の習得にもつながると考えている。

中学校では、外国語活動でのこのような体験を大切にしつつ、学びを中学校へとつなげ、外国語活動において音声で理解できていたことを文字として分析的に理解させる。そして、言語的なルールに則って思考・判断したことを表現するような言語活動を取り入れて授業を行っている。「豊かな学びの姿」をただ単に基礎的・基本的な知識や技能が定着している状態を指すのではなく、他者とかかわり合いを通して、それらを高め合い、探求心をもってさらなる自己の伸長を図る姿ととらえ、以下のように定義した。

- 友だちとのかかわり合いを大切に、互いの考えや気持ちを伝え、それを尊重し合う姿。
- 知的好奇心や課題意識をもって学び、自己の伸長を図る姿。

2 外国語活動・英語科における思考力・判断力・表現力とは

外国語活動・英語科では思考力・判断力・表現力をそれぞれ以下のように定義している。

思考力：場面や状況を多面的な視点でとらえ、伝えようとする事柄を言語的なルールに則って考えることができること。

判断力：場面や状況に応じて、言語材料や伝え方を選択し、使い分けることができること。

表現力：思考・判断を通して、場面や状況に応じた最適な方法で相手に伝えることができること。

思考力・判断力・表現力はそれぞれが別々に身に付くものではなく、一連の流れの中で育成され、豊かなコミュニケーション能力の育成につながるものと考え。よって、小学校の外国語活動では自然な場面設定でその言葉のもつ働きや機能を実感的に理解できるような言語活動を設定する。さらに、中学校では基礎的・基本的な知識・技能を活用して思考し、判断したことを表現するような言語活動を設定する必要がある。このような言語活動により知識・技能を運用レベルまで深化させることができると考え、実践に取り組んでいる。

そして思考力・判断力・表現力を11年間のつながりが見えるように以下のように定義した。

初等部前期	遊びや生活の中で体験しながら、自分の願い、思い、考えを確かにもち、それを表す力。
初等部後期	相手が伝えようとしていることを、これまでに慣れ親しんできた表現や、表情、身振り手振りをもとに考え、場面や状況に合わせて、表現を工夫して相手に伝える力。
中 等 部	既習の言語的なルール（または約束事）に則って考え、相手の表情や状況等のさまざまな要因を考慮しながら、最も適切な単語や表現を選択し、書いたり、話したりすることを通して、相手に自分の考えや気持ちを伝える力。

本学校園では小学3年生から外国語活動を行っており、初等部前期では外国語活動は行ってはいない。しかし、それぞれの段階での思考力・判断力・表現力のつながりを意識しながら取り組むことで、願う学びの姿に近づけるのではないかと見えてきた。具体的には、初等部前期から他者とかかわる経験を重ね、初等部後期からはそれに加え言葉の面白さや豊かさに気付き、中等部の英語学習ではそれまで触れてきた言語を分析的に理解し、自分の考えや気持ちを表現することの楽しさを味わうということである。

評価に関しては、単元を通して思考力・判断力・表現力が高まったかを評価することとし、中学校では評価基準を設定して子どもの変容を見取っている。

3 思考力・判断力・表現力を育成するために

(1) 学びをいかす

学びをいかす子どもの姿を次のように定義した。

伝えたいことを個々の子ども自らが考え、その場にふさわしい英語表現を選択して、実際にコミュニケーションしている。

上記の姿を求めて授業を構想する際に大切にしなければならないことは、教師の手のひらの上での、使用する言語形態が限定されている擬似的なコミュニケーション活動ではなく、言語を総合的に理解したり、表現したりするような言語の実際の使用につながる言語活動を充実させることである。つまり、子ども自身が「この場面でこんなことを言いたい、そのためにはどんな表現を用いてどのように伝えたらいいのだろう」と考え、実際に使ってみる（試行）機会を設けることである。そして、友だちとのやりとりの中で、自分が言いたいことを伝えるのにこの表現では伝わらない、もっと適切な表現はないだろうかといった試行を通して、学びをいかす子どもを育成できるのではないだろうか。

(2) 学び合い

思考力・判断力・表現力を育成するために、学び合いのねらいを二つに整理した。一つ目は学習した表現を使って友だちとやり取りをして、その表現の定着をねらう学び合いである。このような学び合いでは、子どもが他者とのかかわりの中で、基礎的・基本的な知識を活用することができたという思いを抱くことを大切にした。二つ目は、子どもが自分の考えをもち、人の考えと比べながら、自己の伸長を図る探求的な学び合いである。このような学び合いが、一つ目の学び合いへと還元されて個の基礎・基本の定着へとつながる。そして、それが学び合いを深めることにもつながる。どちらの学び合いにおいても現実に言語を使う場面とのつながりや自分との関わりの意識を高くもたせることが重要である。

そこで、自由に自分の思いを伝え合い、相手と会話を進めて課題を解決する活動を充実させた。このような活動では、相手の反応を見て受け入れたり、自分の主張を通したりと状況を判断して自分で表現を選択し、使い分けることが大切であり、相手意識が必要不可欠である。自分の思いを独りよがりでは表現するのではなく、相手と自分を意識しながら、思考・判断した上で表現する。そして、相手が表現したことについてさらに思考・判断し、また自分が表現するというスパイラル構造が生まれる（図1）。しかも、課題を解決するという共通の目標があり、会話を通して自分と相手に一体感も生まれてくる。現実に言語を使用する場面に似た、自分が主体となる活動である。そこには自発的な発話が期待される。このような学び合いが、学びをいかす子どもの育成につながるのではないかと考えている。

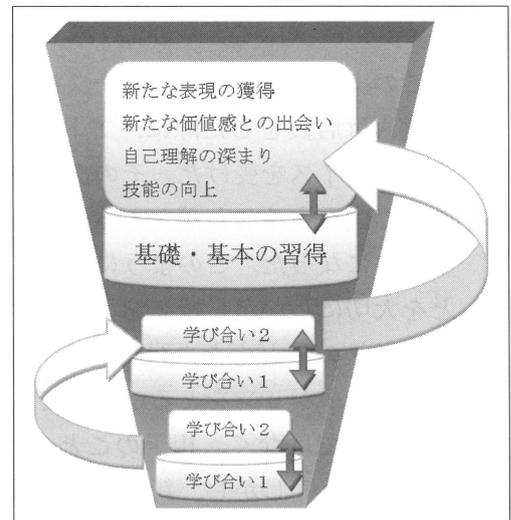


図1

(3) 教師のはたらきかけ

上述の学び合いにおいて、適切なタイミングで学びの場を仕組んでいくという教師のはたらきかけは欠かせない。また、教師は学び合いをコーディネートするような存在として関わり、学級全体に学びの深まりを与える発言を引き出すようにしている。例えば、小学校の外国語活動では「やって見せて」「どうしてその表現を選んだの」などと問い返し、掘り下げる。すると、子どもたちは、自分の英語表現について立ち止まって考え直したり、もっと工夫して表現したりしようとする姿が見られるなど学びを深めることができる。中学校では、学び合う視点を明確化し、自由な会話の中においてもねらいに迫る学び合いをコーディネートするはたらきかけを行う。このような活動を通して、自分なりに工夫して自分の考えを広げたり深めたりしながら思考力を高め、自分で判断して選んだ表現を使い、思いを相手に伝える表現力を高めていく姿が見られると期待している。

(文責 高田 純子)

【参考文献等】

- ・高島英幸『英語のタスク活動と文法指導』大修館書店、2000
- ・村野井仁『第二言語習得研究からみた効果的な英語学習法・指導法』大修館書店、2006
- ・和泉伸一『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』大修館書店、2009